四又（よまた）の百合（ゆり）

宮沢賢治

「正※知（しょうへんち）はあしたの朝の七時ごろヒームキャの河（かわ）をおわたりになってこの町にいらっしゃるそうだ」

こう言（い）う語（ご）がすきとおった風といっしょにハームキャの城（しろ）の家々にしみわたりました。

みんなはまるで子供（こども）のようにいそいそしてしまいました。なぜなら町の人たちは永（なが）い間どんなに正※知（しょうへんち）のその町に来るのを望（のぞ）んでいたかしれないのです。それにまた町からたくさんの人たちが正※知（しょうへんち）のところへ行ってお弟子（でし）になっていたのです。

「正※知（しょうへんち）はあしたの朝の七時ごろヒームキャの河（かわ）をおわたりになってこの町にいらっしゃるそうだ」

みんなは思いました、正※知はどんなお顔いろでそのお眼はどんなだろう、噂の通り紺いろの蓮華のはなびらのような瞳をしていなさるだろうか、お指の爪はほんとうに赤銅いろに光るだろうか、また町から行った人たちが正※知とどんなことを言いどんななりをしているだろう、もうみんなはまるで子供のようにいそいそして、まず自分の家をきちんとととのえ、それから表へ出て通りをきれいに掃除しました。あっちの家からもこっちの家からも人が出て通りを掃いております。水がまかれ牛糞や石ころはきれいにとりのけられ、また白い石英の砂が撒かれました。

「正※知はあしたの朝の七時ごろヒームキャの河をおわたりになってこの町にいらっしゃるそうだ」

もちろんこの噂は早くも王宮に伝わりました。

「申し上げます。如来正※知はあしたの朝の七時ごろヒームキャの河をおわたりになってこの町にいらっしゃるそうでございます」

「そうか、たしかにそうか」王さまはわれを忘れて瑪瑙で飾られた王座を立たれました。

「たしかにさようと存ぜられます。今朝ヒームキャの向こう岸でご説法のをハムラの二人の商人が拝んで参ったと申します」

「そうか、それではまちがいあるまい。ああ、どんなにお待ちしただろう。すぐ町を掃除するよう布令を出せ」

「申し上げます。町はもうすっかり掃除ができてございます。人民どもはもう大悦びでお布令を待たずきれいに掃除をいたしました」

「うう」王さまはうなるようにしました。

「なお参ってよく粗匆のないよう注意いたせ。それから千人の食事のしたくを申し伝えてくれ」

「かしこまりました。大膳職はさっきからそのご命を待ちかねてうろうろうろうろうろうろ厨の中を歩きま

わっております」
「ふう。　そうか」　王さまはしばらく考えていられました。
「すると次（つぎ）は精舎（しょうじゃ）だ。　城外（じょうがい）の柏林（かしわばやし）に千人の宿（やど）をつくるよう工作のものへ言（い）ってくれないか」
「かしこまりました。　ありがたい思召（おぼしめし）でございます。工作の方のものどもはもう万一（まんいち）ご命令（めいれい）もあるかと柏林（かしわばやし）の測量（そくりょう）にとりかかっております」
「ふう。　正※知（しょうへんち）のお徳（とく）は風のようにみんなの胸（むね）に充（み）ちる。　あしたの朝はヒームキャの河（かわ）の岸（きし）までわしがお迎（むか）えに出よう。　みなにそう伝（つた）えてくれ。　お前は夜明の

五時に参(まい)れ」

「かしこまりました」 白髯(しろひげ)の大臣(だいじん)はよろこんで子供(こども)のように顔を赤くして王さまの前を退(さ)がりました。

次の夜明になりました。

王様(おうさま)は 帳(とばり) の中で総理大臣(そうりだいじん)のしずかにはいって来る足音を聴(き)いてもう起(お)きあがっていられました。

「申(もう)し上げます。 ただいまちょうど五時でございます」

「うん、わしはゆうべ一晩(ひとばん)ねむらなかった。 けれども今朝(けさ)わしのからだは 水晶(すいしょう) のようにさわやかだ。 どうだろう、天気は」王さまは 帳(とばり) を出てまっすぐに立た

れました。

「大へんにいい天気でございます。修彌山（しゅみせん）の南側（みなみがわ）の瑠璃（るり）もまるですきとおるように見えます。こんな日如来正※知（にょらいしょうへんち）はどんなにお立派（りっぱ）に見えましょう」

「いいあんばいだ。街（まち）は昨日（きのう）の通りさっぱりしているか」

「はい、阿耨達湖（アノブダブこ）の渚（なぎさ）のようでございます」

「斎食（とき）のしたくはいいか」

「もうすっかりできております」

「柏林（かしわばやし）の造営（ぞうえい）はどうだ」

「今朝（けさ）のうちには大丈夫（だいじょうぶ）でございます。あとはただ

窓（まど）をととのえて掃除（そうじ）するだけでございます」

「そうか。ではしたくしよう」

王さまはみんなを従（したが）えてヒームキャの川岸（かわぎし）に立たれました。

風がサラサラ吹（ふ）き木の葉（は）は光りました。

「この風はもう九月の風だな」

「さようでございます。これはすきとおったするどい秋（あき）の粉（こな）でございます。数知れぬ玻璃（はり）の微塵（みじん）のようでございます」

「百合（ゆり）はもう咲（さ）いたか」

「蕾（つぼみ）はみんなできあがりましてございます。秋風（あきかぜ）

の鋭い粉がその頂上の緑いろのかけ金を削って減してしまいます。今朝一斉にどの花も開くかと思われます」

「うん。そうだろう。わしは正※知に百合の花をささげよう。大蔵大臣。お前は林へ行って百合の花を一茎見つけて来てくれないか」

王さまは黒髯に埋まった大蔵大臣に言われました。

「はい。かしこまりました」

大蔵大臣はひとり林の方へ行きました。林はしんとして青く、すかして見ても百合の花は見えませんでした。

大臣は林をまわりました。林の陰に一軒の大きなうちがありました。日がまっ白に照って家は半分あかるく夢のように見えました。その家の前の栗の木の下に一人のはだしの子供がまっ白な貝細工のような百合の十の花のついた茎をもってこっちを見ていました。

大臣は進みました。

「その百合をおれに売れ」

「うん売るよ」子供は唇をまるくして答えました。

「いくらだ」大臣が笑いながらたずねました。

「十銭」子供が大きな声で勢よく言いました。

「十銭は高いな」大臣はほんとうに高いと思いなが

ら言いました。

「五銭」子供がまた勢よく答えました。

「五銭は高いな」大臣はまだほんとうに高いと思いながら笑って言いました。

「一銭」子供が顔をまっ赤にして叫びました。

「そうか。一銭。それではこれでいいだろうな」

大臣は紅宝玉の首かざりをはずしました。

「いいよ」子供は赤い石を見てよろこんで叫びました。大臣は首かざりを渡して百合を手にとりました。

「何にするんだい。その花を」子供がふと思いついたように言いました。

「正※知にあげるんだよ」

「あっ、そんならやらないよ」子供は首かざりを投げ出しました。

「どうして」

「僕がやろうと思ったんだい」

「そうか。じゃ返そう」

「やるよ」

「そうか」大臣はまた花を手にとりました。

「お前はいい子だな。正※知がいらっしゃったらあとについてお城へおいで。わしは大蔵大臣だよ」

「うん、行くよ」子供はよろこんで叫びました。

大臣(だいじん)は林をまわって川の岸(きし)へ来ました。

「立派(りっぱ)な百合(ゆり)だ。ほんとうに。ありがとう」王様(おうさま)は百合(ゆり)を受けとってそれからうやうやしくいただきました。

川の向(む)こうの青い林のこっちにかすかな黄金(きん)いろがぽっと虹(にじ)のようにのぼるのが見えました。みんなは地にひれふしました。王もまた砂(すな)にひざまずきました。

二億年(おくねん)ばかり前どこかであったことのような気がします。

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店
１９６９（昭和44）年７月20日改版初版発行
１９９３（平成５）年６月20日改版71版発行
入力：鷹田佳子
校正：平野彩子
ファイル作成：野口英司
２０００年8月25日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。

●表記について

本文中の※は、底本では次のような漢字（JIS外字）が使われている。

正※知（しょうへんち）

如来正※知（にょらいしょうへんち）編

第3水準1-84-34